となりのココロ

奨励	齋藤 開〔さいとう・かい〕
奨励者紹介	日本キリスト教団高槻南平台教会牧師

自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。『神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。』ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

（ルカによる福音書　18章9-14節）

メシア症候群

皆さんはメシア症候群という言葉を聞いたことがあるでしょうか。これは病気ではないのですけれども、人の気質や性格に関するものです。メシアというのは、私たちが知っているあのメシア、つまり、救い主、救世主ということであります。たとえば、教会ですと「礼拝よりも教会員のための食事の準備が気になってしょうがないと言う人」「人に仕事を与えないで、全て自分で背負ってしまう人」。このような「私がいなければ、私がやらなければ誰もやらない」と思ってしまう助けたがり屋ということができるかもしれません。自分のことを放っておいてまでも他人を助けることを畏れない。これを聞くと、素晴らしい人のように聞こえます。しかし、他人の足りないこと、他人の不備が気になってしょうがない。放っておけばいいものも手を出してしまう。ボランティアが好きな人にそういう人が多いかもしれません。あるいは、牧師と呼ばれる人に多いと言われています。

以前、メシア症候群について書いているものを目にしたことがあります。それによると、この症候群は度を過ぎなければ、他人に関わることをしない人よりも、人間的な温かさがある。しかし、実は自分が他人の役に立つことでしか、自分の存在意義を見いだせない。相手を助けることで、相手を見下し、自分よりも格下の人間とすることで、優越感を得るという側面があるのだそうです。つまり、格下の人間に対する依存なのです。

人助けによる優越感

私はなかなか鋭いなと思いました。確かに、人を助けるということはいいことのように思います。緊急の助けを必要としている人に対しては、すぐさま自分のことを放っておいて助けなければなりません。しかし、気をつけなければならないのが、私がやらなければというおせっかいが、実は自分の存在を満足させるためだということがあるのです。助けを必要とする人間を見ると、それを助けてあげる自分、役に立つ自分がいる、という優越感がそこにあるときがあるのです。それは、裏を返せば、役に立たない、お前は何もできないと言われることが怖いということです。自分が何か力があって、役に立たなければ、他者に見捨てられてしまうという恐怖があるということです。自分の存在意義がなくなってしまうことへの恐れがあるということです。

自分だけを信じる

そのような恐れは誰にでもありうることです。そんなとき私たちは、今日の聖書に出てくるファリサイ派の人に似ています。「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。」と聖書にはあります。うぬぼれてという言葉が出てきますが、この言葉は、自分だけを信じるという意味の言葉です。自分だけを信じている人、その人にイエスは話をされます。ファリサイ派の人はこのように祈りました。ファリサイ派というのは、神様が人間に与えた決まりごと、律法を研究して、それを一生懸命に守ろうとする人たちのことです。「私は、神様の決まりごとを必要以上に守っています。断食だとか、全収入の十分の一を神様にささげるとか、神様のためにこれ以上ないというぐらい尽くしています。だから、正しい人間です」。

このファリサイ派の人は、自分のために、自分で満足するためにこのように祈っているのです。ファリサイ派の人は心の中で祈ったと書いてありますけれども、ギリシャ語の原文を直訳すると「自分に向かって祈った」と訳すことができます。つまり、この祈りは神様に向かっているようだけれども、実は自分に対して、このように私は正しい人間であると祈っているにすぎないのです。

もはや、この人は、神を信頼しているのではなく、自分のもてる力や自分の功績に依存している。自分のために生きており、自分で自分を助けようとしていると聖書は語りたいのではないかと思います。

必要なのは居場所

しかし、一方徴税人は目を上げることすらできませんでした。「神様私を憐れんでください」。そのひと言しか言えませんでした。徴税人というのは、当時自分たちを支配していたローマ帝国のために、自分たちの仲間から税金を取り立てる人たちのことでした。だから、仲間からは大変嫌われていました。もちろん、税金取り立て放題で大儲けという人もいたでしょうけど。なかには、この仕事をやりたくなかった人もいたでしょう。でも、やるしかなかった。自分が生きていくためには、この仕事をするしかなかった。そんな人がいたでしょう。そんな彼らを人びとは、軽蔑のまなざしで見ていました。同じ仲間であるのに、徴税人だけは居場所がなかったのです。彼は自分に頼ることができません。自分を信じることも、自分のもてる力で立とうとすることもできません。彼に必要なのは、自分を分かってくれる人であり、居場所でありました。このファリサイ派と徴税人ですが、神様の前に正しいとされた人は、徴税人であるとイエスは言いました。「えっ、どうして」と思われる人がいるかもしれません。ファリサイ派の人は神様が求めている以上に決まりをよく守り、神様にいっぱい献金して、こっちのほうが偉いのではないか。そう思うかもしれません。

自分だけでなく
隣人を見よ

しかし、イエスは言うのです。いくら、神様の教えをきっちり学んでも、神様の決まりを必要以上に学んでも、自己満足であったら何の意味もない。自分だけを見るのではなくて、しっかりと隣の人を見ることがなければ、誰かを傷つけてしまうことさえあるのだとイエスは言うのです。人間は自分の力に頼ろうとする。自分を信じ、自分の力を示すことがいいことだと思っている。しかし、それは他者とのつながりを断つことでもあるのだ。人は一人では生きられない。だから、一緒に苦しみや弱さを担いあいながら人は生きるのだと言っているように思います。

私は教会の牧師をしていますけれども、他者のために何ができるであろうか日々考えさせられます。教会にはさまざまな背景をもった人が来ています。心の病気を抱えている人、家族に問題を抱えている人。なかには家族に自分がどれだけ虐げられているかということを延々と語って帰っていく人もいます。私は、最初はその人の話を一生懸命聞くのです。しかし、私自身がだんだんうんざりしてきて、解決を探ろうと焦ってしまって、「こうしたらよいのではないか」「そう考えるより、こう考えた方がいいのではないか」などと、アドバイスするようになりました。しかし、その人に「先生、最近冷たくなった」と、言われたときに、ハッとしました。実は私は思い上がっていたのではないか。自分を助けるために、その人を実は傷つけていたのだと思うようになりました。その人は、私の助言を求めているのではなくて、話を聞いてほしかっただけなのではないか。存在を受け止めてほしかったのではないかと思うようになったのです。

このように、実は牧師のふりをしていたのではないかということに気づかされたのです。相手の悩みを解決してあげることで、自分は牧師であることを確認しようとしたのかもしれません。下手な助言よりも、その人の話を聞くこと、その人の思いを受け止めること、これ以上に大切なことはないと学びました。

イエスの生き方は、飢えている人、呻いている人、差別される人、泣いている人をしっかりと見て、そして自分も飢え、自分も呻き、自分も差別され、自分も泣く生き方です。その人と同じものを一緒に背負う生き方です。そこには、居場所があり、自分がいてもいいと思えるところがあります。その居場所を私はつくる者でありたいと願います。

2013年5月8日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録